

いそ
なが
ひで
お
磯永秀雄

光市
(1921～1976)

磯永秀雄の詩の底に流れているのは、人間の生命への深い愛である。同時に、人間性を損なうものに対する厳しい批判である。その大きな原因としては、学徒出陣で送られた南の島での戦争体験があげられる。戦後、教職の傍ら、主宰した詩誌『駱駝』を中心に、多彩な文学活動を展開するが、常に読者をひきつけてきたのは、前述の姿勢のもとに生まれた作品の質の高さによることには言うまでもない。一方、その魅力的な人柄に接した教え子たちは、年月を経た今もなお、敬慕の念を失わない。文学も、教育も、純粋さと愛に貫かれていた。

(陶山祐二)

【主な著作】

詩集『浮灯台』（ユリイカ、昭和26年）

詩集『別れの時』（ユリイカ、昭和34年）

詩集『燃える海』（下関長周新聞社、昭和48年）